

機関番号：14501  
 研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2009～2010  
 課題番号：21700617  
 研究課題名（和文） イギリスのホッケー普及過程における企業内クラブの活動に関する研究  
 研究課題名（英文） A study of in-company hockey clubs' activities during the spread period of the organized game of hockey in England  
 研究代表者  
 秋元 忍（AKIMOTO SHINOBU）  
 神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・准教授  
 研究者番号：50346847

研究成果の概要（和文）：本研究は、イギリスのホッケー普及過程における企業内クラブの活動について検討したものである。これらのクラブは、従業員にホッケーのゲームの経験の場を提供し、ホッケーの地域的な普及の一翼を担っていた。ホッケーの普及過程には統括組織主催の様々なレベルの試合の拡充や、その加盟クラブの活動の展開のみでは把握することができない重層性が存在したことを、企業内ホッケークラブの活動実態は裏書きしている。

研究成果の概要（英文）：This study considers in-company hockey clubs' activities in the diffusion of the game in England. These clubs provided opportunities for its employees to experience the game of hockey and played a major role in the local diffusion of the game. These club's daily activities support the contention that there was a multilayered structure in the diffusion of hockey, i.e., the spread of the game cannot be attributed solely to the games held at various levels by the governing bodies or to the expansion of the activities of its affiliated clubs.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学 スポーツ史

キーワード：ホッケー 近代スポーツ 企業内クラブ

#### 1. 研究開始当初の背景

イングランドにおけるホッケーの普及は、19世紀末のゲームの組織化以降、多様な実相を伴いつつ進展した。近年の研究は、20世紀初頭において、統括組織（男性は Hockey Association、以下 HA、女性は All England Women's Hockey Association、以下 AEWH）により非難されていた男女混合ホッケーや、禁止されていたリーグ戦を実施するクラブが存在したこと、またこうしたクラ

ブがむしろ増加傾向にあったことを報告している。これらの成果を踏まえれば、ホッケーの、さらには近代スポーツの普及過程に関する認識を深めるためには、これまで看過されてきた活動の母体組織への着目が必要であると言える。以上の問題関心から、本研究では、新たな分析視角として、企業と密接なかかわりを持つホッケークラブの活動に焦点を当てた。内容、メンバーの社会階層および性別のいずれにおいても、多様な活動が展

開されていたという事実があるにもかかわらず、従来の研究では、企業内ホッケークラブに着目し、その活動実態を検討したものは見られない。分析の視点を地域クラブに留めることなく、企業内クラブの活動実態にまで広げていけば、ホッケーのみならず、近代スポーツの普及過程の新たな一面が見えてくる可能性がある。以上の着想に基づき、本研究では、企業内ホッケークラブを主対象とした歴史研究を行うことにした。

## 2. 研究の目的

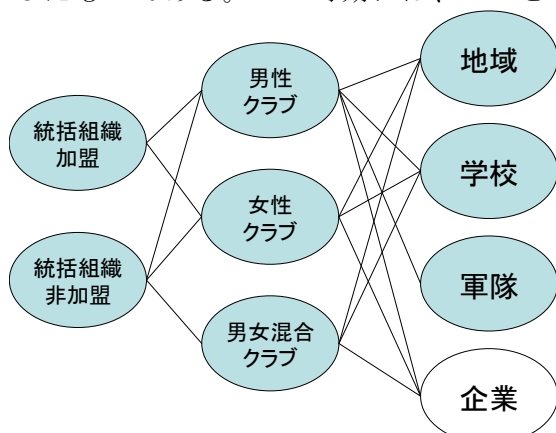
本研究は、イギリスのホッケー普及過程における企業内クラブの活動について検討することを目的とする。この目的を達成するため、次の2点の研究課題を設定し、それぞれ単年度の研究課題とした。(1)イングランド北部ヨークのココア工場、ラウントリー・ココア・ワークス内に設立されたクラブの活動実態の解明(平成21年度研究課題)。(2)イングランド東部のノリッジで操業していたコールマン社のマスタード製造工場、キャロウ・ワークスに設立されたホッケークラブ活動実態の解明(平成22年度研究課題)。

以上の検討を通じて、従来検討されることがなかった、ホッケー普及過程における企業内クラブの役割の評価を試みる。

## 3. 研究の方法

### (1)研究対象の設定：企業内クラブの定義

下記の図は、本研究の対象年代におけるホッケークラブの様態を、統括組織加盟・非加盟の別、性別、母体組織の別の3点から分類したものである。この時期には、HAと



AEWHA という男女別の全国的統括組織が並存し、それぞれ加盟クラブのゲームを管轄していた。ただしこれらの両組織に加盟せず、活動を継続したクラブも存在した。男女混合ゲームは男女の両統括組織から認められていなかった。また母体組織は、地域、学校、軍隊(男性のみ)、企業に大別される。本研究における企業内クラブとは、企業を母体とし、男性、女性、男女混合それぞれの形態があり、統括組織加盟、非加盟の両者が存在し

たクラブである(図右下)。

### (2) 史料について

2009年度に史料調査のためのイギリス研修旅行を実施し、企業内ホッケークラブの活動が記録された社内報、ホッケー関連雑誌、地方新聞等の調査を行った。本調査によって得られた主要史料は以下の通りである。

#### ①社内報

*The C. W. M* (ラウントリー社の社内報)

*The Carrow Works Magazine*

(コールマン社の社内報)

#### ②ヨーク周辺の地方新聞記事

*The Yorkshire Weekly Herald*

#### ③ノリッジ周辺の地方新聞記事

*Eastern Daily Press*

*Eastern Evening News*

#### ④ホッケー関連雑誌

*The Hockey and Amateur Football Monthly*

*The Hockey Field*

#### ⑤ホッケー関連年鑑、ホッケー書、ルールブックほか

### (3) 研究の手続き

上記の史料に基づき、本研究では、①クラブの活動の背景、②クラブの設立と活動の展開、③近隣へのゲーム普及に及ぼした影響の3点から、企業内ホッケークラブの活動実態の解明と役割の検討を行った。

## 4. 研究成果

### (1) イングランドのホッケー普及過程における企業内クラブの役割 —ラウントリー・ココア・ワークスのクラブを事例として1911-1914年—

2009年度は、ヨークのココア工場、ラウントリー・ココア・ワークス内に設立されたホッケークラブを対象とし、ホッケーの普及過程における企業内クラブの具体的事例という観点から、以下の3点を解明することを課題とした。①クラブの活動の背景、②クラブの設立と活動の展開、③ホッケーのゲーム普及に及ぼした影響。以上の検討を通して、ホッケーの普及過程の特徴について新たな説明を試みた。結果は以下の通りであった。

①ラウントリー・ココア・ワークスは、19世紀から20世紀初頭におけるヨークの経済発展を象徴するココア、チョコレート工場であった。この工場の代表者は、先進的なクエーカー実業家として知られていたジョセフ・ラウントリーであった。彼は1869年にココア工場の経営に参加した。以降、新製品開発と技術改良によって成功を収め、事業規模を拡大させていった。1869年の従業員はわずかに12人であったが、1906年には4,000人を超える大工場となった。社会改良にも強い関心を持っていた彼は、事業の発展とともに、従業員の福祉の向上を意図した。この工

場の役員たちは、若い従業員向けの家庭科、体操科授業を提供し、社内報の発行やスポーツを含むクラブ活動を支援した。こうして従業員たちのスポーツ活動が種目も機会も共に増加していく中、工場の周辺では周知のゲームであったホッケーが、1911/12年のシーズンに導入されるに至った。

②サッカー、クリケット、ローンテニス、クロッカーと比較すれば後発的であったが、1911年10月、男女のホッケークラブ設立が社内報に報じられた。女性のクラブは約30人のメンバーを集め、練習試合をクラブ内で実施した。女性のクラブは、2人の女性体操教師がコーチ役を担当した。彼女たちには体操教師養成学校等におけるホッケー経験があった。一方、男性のクラブにもすぐにプレイヤーが集まり、ゲームが開始された。彼らの多くもまたこのゲームに不慣れであった。ホッケーは、男女ともに、工場の従業員にとってほとんど未経験のゲームであった。しかし、クラブは全従業員に開かれていた。ココア・ワークスは従業員に新たなゲームの経験の場を与えたのである。

男性のクラブは、設立直後から積極的に対外試合を行っていた。1911/12年の対戦結果は、21戦9勝11敗1分であった。翌1912/13年には、男性のセカンド・イレブンも運営されるようになり、他クラブとの対戦を開始した。このシーズンのファースト・イレブンの最終戦績は、19戦14勝4敗1分であった。セカンド・イレブンの最終戦績は不明である。3シーズン目、すなわち1913/14年のファースト・イレブンの対戦記録は2月末までしか記録されていない。そのため最終戦績は不明である。しかし、10月から2月までの期間、ファースト・イレブンはほぼ毎週他クラブとの対戦を行っていた。またセカンド・イレブンは、12戦5勝5敗2分でのシーズンを終了した。ファースト、セカンド両チームともに、周辺クラブとの充実した対戦プログラムを消化していた。

女性のホッケークラブは、最初のシーズンには対外試合よりもクラブ内の練習試合が活動の中心であったようである。シーズン末までに、クラブのメンバー数は36人まで増加していた。翌シーズン、すなわち1912/13年以降は、女性のクラブでも対外試合が活発に行われるようになった。このシーズン中に計10クラブとの対外試合が実施された。1913/14年の女性のクラブの対外試合の結果の詳細は不明だが、地方新聞記事によれば、ほぼ毎月対外試合が行われていたとみてよい。メンバーはさらに増加し、シーズン末には44人を数えていた。

第一次世界大戦の開戦は、1914/15年以降の工場内の男性のクラブ活動の継続を困難なものにした。1914年12月の社内報には、

工場内の部門別従軍者一覧が掲載されているが、その総計は432人に及んだ。以降の社内報には、戦死者の追悼記事や負傷者の報告が続いた。こうした状況の中でも女性たちはホッケークラブの運営を断念することはなかったが、社内報は1914/15年の男性ホッケークラブの活動を掲載していない。再び社内報に男性のホッケークラブの活動が報じられるのは、1920/21年開始時のことであった。おそらく、1914/15年から1919/20年まで、男性ホッケークラブは活動の中断を余儀なくされたのであろう。

③上記のように、ココア・ワークスのホッケークラブは、男女ともに工場内に留まらない活動を展開していたが、対外試合の相手にはある特徴があった。男性のホッケークラブは、1912/13年開始時に、12のクラブと計23試合を計画していた。これらのクラブを、このシーズンのヨークシャーHA加盟32クラブと照合すると、該当するクラブは含まれていなかった。同様に、同シーズン中、女性のクラブが対戦した10クラブの中には、ヨークシャーのAEWHA加盟8クラブの名前は含まれていなかった。以上から、ココア・ワークスのホッケークラブは、男女ともに、統括組織非加盟ホッケークラブのネットワークに参画し、対外試合を計画、実施していたことがわかる。当時のヨーク周辺には、統括組織加盟クラブ、非加盟クラブの両ネットワークが存在し、それぞれ地域的なゲーム実施の場を形成していた。ヨークにおいて後発的にクラブ設立を果たしたココア・ワークスは、後者に参画しつつ、対外試合の頻度においても、またその相手の多様さという点においても、活発な活動を展開していたと言える。ヨーク周辺へのホッケーの普及は、統括組織の、またその加盟クラブの活動によってのみ進展したのではなかった。上述した活動実態をも考え合わせれば、ココア・ワークスは、地域のホッケーの活性化に十分に貢献していたと評価できる。

ラウントリー・ココア・ワークスのホッケークラブは、イングランド北部の一地域の統括組織非加盟クラブのネットワークに参画し、対外試合を行っていた。このクラブへの支援は、先進的な役員らによる企業福祉の一端であったことは疑いないが、同時に従業員にホッケーのゲームの経験の場を提供し、そのゲームに喜びを見出した人々をメンバーとして巻き込みながら、ホッケーの地域的な普及の一翼を、統括組織の管轄外で担ったことも確かである。ホッケーの普及過程には、統括組織主催の様々なレベルの代表試合の拡充や、その加盟クラブの活動の展開のみでは把握することができない重層性が存在したことを、ラウントリー・ココア・ワークスのホッケークラブの活動実態は裏書きして

いる。

(2) 1914 年以前のイングランドにおける企業内ホッケークラブの活動について — コールマン社の工場、キャロウ・ワークスを事例として —

2010 年度の研究では、イングランド東部のノリッジで操業していたコールマン社のマスタード製造工場、キャロウ・ワーク스에設立されたホッケークラブを研究対象とした。活動の背景、活動内容の解明、活動の特徴の解明の 3 点を課題とし、企業内クラブが地域的なホッケーのゲームの普及にかなる役割を果たしたのかを検討した。成果は下記 3 点に集約できる。

① 19 世紀半ばから 20 世紀初頭にかけて、ノリッジでは労働者人口の著しい増加が見られた。中でも飲食業労働者数の増加は群を抜いていた。その増加の大部分は、ノリッジ最大の雇用者となっていたコールマン社の発展が占めていた。ストック・ホリー・クロス社のマスタード工場の買収（1814 年）後、この工場はしばらくの間緩やかな成長を見せただけであったが、1850 年代のキャロウ・ワークスの建設、操業以降、事業規模は拡張を続けた。1863 年に 500 人であった従業員は、1900 年にはキャロウ・ワークスのみで 2352 人まで増加した。また第一次大戦前には、イギリス 100 大製造業の一つに数えられるに至り、コールマン社は全国的な名声を得る企業へと成長を遂げていた。

従業員数の増加とともに、キャロウ・ワークスでは、教育・福祉プログラムの拡充が図られた。日曜学校、平日男性・少年部、平日女性・少女部の部門別に、「ソーシャル・スキーム」の配当に基づいたクラブ活動や授業が、従業員に提供された。

この福祉・教育プログラムの中にはスポーツ活動も含まれていた。その一環として、役員たちはスポーツ施設、用具を従業員向けに整備した。社内報には、男性の活動として、サッカー、クリケット、ホッケー、体操、水泳、ビリヤード、サイクリング、ボウルズ他が、女性の活動には体操、水泳、ネットボール、ホッケー、サイクリング他が掲載されていた。全従業員を対象としたアスレチック・スポーツは、恒例の年中行事化していた。充実した施設、用具とともに、キャロウ・ワークスの従業員は、スポーツ活動を満喫することができた。男女ホッケークラブの活動、こうした充実したプログラムの中に位置づけられていた。

② 男女ともに、ホッケークラブの正確な設立時期は不明であるものの、社内報の活動記録によれば、遅くとも女性は 1907/08 年、男性は翌 1908/09 年のシーズンには活動を開始していたことを確認できる。下記の表は、ソ

ーシャル・スキームに配当されたホッケーの曜日、時間を、社内報を史料としてまとめたものである。

社内報掲載年月	男性・少年部門	女性・少女部門
1908年10月	-	月、火、木、金曜 午後1~2時 土曜 午後2時45分
1909年10月	土曜午後	月、火、木、金曜 午後1~2時 土曜 午後2時45分
1911年1月	土曜午後	なし
1911年10月	土曜午後	なし
1912年10月	土曜午後	なし
1913年10月	土曜午後	なし

1907 年 12 月の社内報には、女性のクラブが社内ゲームを行っていたことが報じられている。しかし、上記の表は、1910/11 年以降、ホッケーは女性・少女向けプログラムから削除されたか、正式な活動としては停滞したことを示唆している。女性のゲームとしてネットボールが人気を得ていたことがその背景にあげられるが、詳細は不明である。

一方、男性のホッケークラブの活動は、1908/09 年以降活発化し、社内のみならず対外試合も盛んに行われていた。1909/10 年に計画、実施された対外試合には 10 のクラブ、チーム名を確認することができる。同シーズンには、HA の支部であるノーフォークの州アソシエーションの設立メンバーとなり、統括組織加盟クラブとなった。キャロウ・ワークスの男性クラブは、統括組織のゲームを実施するネットワークに参画し、豊富な対外試合を満喫しつつ、統括組織のゲーム普及の一翼を担っていたのである。彼らの活動は、HA ハンドブックやソーシャル・スキームへの配当から判断すれば、第 1 次大戦の勃発まで継続したものと考えられる。

③ 下記の表は、ココア・ワークスと、キャロウ・ワークスの活動を比較したものである。

	ラウンダー社 ココア・ワークス	コールマン社 キャロウ・ワークス
所在地	イングランド北部 ヨーク	イングランド東部 ノリッジ
ホッケー 導入時期	1911/12年 (男女共)	遅くとも1908/09年(女性) 遅くとも1909/10年(男性)
対外試合	男女共実施	男性のみ記録あり
統括組織 加盟・非加 盟の別	非加盟 非加盟クラブの ネットワークの中 で対外試合継続	加盟(男性のみ、1909/10 年から) 州アソシエーシ ョンの設立メンバー

キャロウ・ワークスの活動の大きな特徴は、男性のみではあったが、統括組織加盟クラブとして活動を続けていた点にある。ココア・ワークスは統括組織非加盟クラブのネットワーク内でゲームを行っていたが、キャロウ・ワークスは、企業内クラブが統括組織の

ゲームの地域的普及に大きな役割を果たした事例として重要である。以上の成果が示すように、企業内クラブは、おそらくこれまで考えられていた以上に、多様な活動を展開しつつ、近代スポーツ普及の重要なアクターを演じていた可能性がある。ホッケーのみならず、20世紀初頭のスポーツの普及過程における企業クラブの役割についてはより多くの研究が要請される。これらの研究成果は、スポーツの普及過程のより多様で複雑な実態を示すことになるだろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 秋元忍、イングランドのホッケー普及過程における企業内クラブの役割 — Rowntree Cocoa Worksのクラブを事例として 1911-1914年—、査読有、体育史研究、第27号、2010、1-13

[学会発表] (計2件)

- ① 秋元忍、1914年以前のイングランドにおける企業内ホッケークラブの活動について —コールマン社の工場、キャロウ・ワークスを事例として—、日本体育学会第61回大会、2010年9月8日、中京大学
- ② 秋元忍、イングランドのホッケー普及過程における企業内クラブの活動について —Rowntree Cocoa Worksのクラブを事例として 1911-1914年—、日本体育学会第60回大会、2009年8月26日、広島大学

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

秋元 忍 (AKIMOTO SHINOBU)

神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・  
准教授

研究者番号：50346847

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし